

小川鼎三先生を偲んで

大鳥 蘭 三郎

小川先生が長い闘病生活の末に遂に亡くなられたことは私に大きなショックを与えたことであると共に、日本医史学会としてもかけがえのない大切な方を失ったということで、学会のために大きな損失であることを思うと、言いようのない淋しさを覚える。

小川先生が前前代理理事長の内山孝一先生の後を受けて、日本医史学会理事長の任に就かれてからもうかなりの時日がたった。歴代の理事長の中で小川先生ほど長い間理事長の任にあった方は全くなかった。日本の医史学界の中心的人物として私共が考えていただけに、先生が亡くなられたことはまことに大きな損失であると言わなければならない。

私が同先生と親しく御交際をしたのは、先生が医史学会の理事長になられ、順天堂大学医学部の医史学教授として同大学の医史学教室を主宰し、同教室に日本医史学会事務室を開かれてからのことである。それ以来一週間に少なくとも二、三回は先生のお部屋に入入りし、先生の聲咳に接し親しくお話を伺っていた。先生の物の考え方には殊に心をひかれるものがあった。その頃は毎週一回先生を含めて数名の者が抄読会を開いていたが、その中でも先生のお話はまことに貴重なものであったと今にして感じ入っている。

私が小川先生に初めてお目にかかったのは昭和九年のことであったと思う。もっともそれより以前に先生といっしょの会に出たことはあった筈であるが、その時はお互いに話し合うこともなく、またお互いに認め合うこともなかった。昭和

九年の頃にドイツからシーボルト文献資料が日本に借用されてきたことがあった。その時に私もシーボルト文献資料研究会の一員として、同会に関係していた。同文献の中に日本産の鯨のことについての高野長英等のオランダ語の文献があったのであるが、日本産の鯨のことであればどうしても小川先生に調べていただかなければならないということになって、小川先生をお訪ねしたのが最初である。この一事をとってみても人と人との出会いはまことに奇しきものであるとつくづく思わずにはいられない。

先生との永い間のおつきあいの中で、私が受けた印象は数限りなく多いが、その中でも特に忘れられない私の印象を二、三記して先生を偲んでみたい。

私が先生の研究室に出入りして受けた最初の印象は、先生は物事の研究をその本源にさかのぼって究められていたことである。そのことは先生の手許に備えられていた辞書が多いことによく現れていた。辞書の種類が多かったこともたしかにその一面を裏書きするものであった。

次に記してみたいことは、あまりに個人的なことで恐縮であるが、小川先生と緒方富雄先生との友情についてである。この両先生の御交際は京都の第三高等学校におられた頃からのものであったことであるが、おがわ、おがたと席順も近かっただけに両先生の御交際は特別なものがあつたように思われる。両先生のお人柄はかなり違つていたように思われたが、学会、或いはその他の会合でみる両先生の御交際は何ともいえぬ味があつた。

先生は日本医史学会の理事長としてすべての会務についてもこまめに尽力されて、さらに先生の書かれる文章は極めて率直であつたと思わざるを得ない。先生の面目が躍如としていたものと考えられる。

ちょうど満十年前の十一月末、私は思いもよらぬ胃潰瘍の手術を受けることになつたが、その時先生は術前にも術後にも何回となく入院中の慶応病院の病室までお見舞下さつて、温い励ましのお言葉をかけていただいた。その後数回の腸閉塞で入院の折にも同様度々の御来院をいただいた。先輩でご年長の先生からこのような御心づかいをいただいたことはい

つも大変恐縮に思い感謝の極みであった。

それにもかかわらず昨年末からの先生の御入院中は、私もまた病後回復のために南熱海温泉病院に入院中で、先生の御近況を医史学会本部からの電話で伺い、心からご案じ申上げご回復をお祈りしていたが、ついに直接にお見舞してお話出来る折もないまま、私が退院、帰京して間もなく御逝去になられたことは、今もまことに申し訳なく、残念なことである、あらためて、感謝とお詫びの言葉を申し上げたいと思う。

長い年月の御交情を偲び、心から御冥福を祈って追悼の文といたす次第である。

小川鼎三先生を偲んで

大 滝 紀 雄

小川鼎三先生は解剖学、ことに脳神経系統の研究、鯨類の研究、医史学の研究等、幅広い分野で活躍され、多数の立派な業績を残された稀にみる勝れた学者であった。その緻密な思考力に加えて、広い包容力をもつ偉大な人格者であったため、先生に接する人々は誰でもいい知れない魅力にとりつかれるのであった。今静かに昔を振り返ってみると、先生の物静かな態度、ゆっくり一言一言を考えながら語られる先生の言葉、お世辞もなく、人を咎めることを決してせず、しかも大事なことはピシツといわれる先生のありし日の姿が思い出される。私は一開業医の身でありながら、医史学の分野で公私共、大へん先生のお世話になった一人である。